

歟、大凡物之得名皆有、所由來、如蘇耽橘井、董奉杏園、徐老海棠、巢仲蔚蓬蒿宅、王儉蓮府、王祐槐堂、和靖梅屋、元之竹樓、佛印松社、魏氏菊莊之類、皆有斯物、而後得斯名也、今余所名其不然、既有名而後得物、初余雖傲商弼、以設此名、然非不思此花、唯未遑栽之、其有所待乎、然則家僮所為偶合、余意不亦可乎、於是軒名不虛、以益起、向陽之志而已、○下略

〔多識編三〕木綿今按幾和多、異名古貝、綱目班枝花、今案波牟仁也、自南蠻來、古終和名幾和多、日本民間所作是也、

〔書言字考節用集〕棉キウタ 木綿同 古終同 多織編

〔倭訓栞前編七〕きわた 木綿の義、布花ともいへり、今世に行はる、物の俗稱也、西竺には太古より有しかども、宋の末に始て種を傳へ、朝鮮には元より種を得たり、我邦には天正永祿の頃より渡來し、万民日用の要物となれり、紅毛語にかとうんころいといふ、かとうんは綿也、ころいは草なりといへり、花を蝶といひ、實を桃といふ、似たるをもてなり、本草にも如桃といへり、凡そ木綿と稱するもの四品あり、上古我邦にゆふとよべる是一種、彼邦にて杜仲の一名にいふものは一種、蠻名ばんやと稱するものは一種、今の綿花布是一種也、近年一種の木わたあり、高さ七八尺に及、桃は常の如く、實ほそ長して小也、又一種あり、其實丸くて小也、棉花と稱す、肥後に安永の初に、紺色の綿できたり、一年にして絶にき、

〔鹽尻三〕綿花をきわたといふは、唐にも木と草と二種あり、木綿はふとくして桐のごとく、葉は胡桃に似たりとかや、されども草綿には劣りけるよし、草をもすべて木綿といふ、梵語には都貝とも、迦波羅ともいふよし、翻譯名義抄に見えたり、通鑑梁紀史炤が釋文、及び大學衍義補綴耕錄等に、木綿の事をいへり、

〔日本後紀八〕延曆十八年七月、是月有一人、乘小船漂著參河國、以布覆背、有犢鼻、不著袴、左肩著紺